

短期集中講座としての日本語教育について

谷守正寛

甲南大学 国際言語文化センター

神戸市東灘区岡本 8-9-1, 658-8501

要 旨

本稿は、稿者が総合的に企画・運営を行っている短期集中講座における日本語教育をめぐり、そのシラバス・授業計画の工夫、教材開発研究、教授方法、体験学習等にわたる教育・学習支援について、単なる報告としてではなく、様々な課題を吟味しつつ、学習支援上有益となる提案も含めた視点で考察するものである。

そこでは文法と書くことの指導・学習支援と、会話・聴解等の言語運用面の指導・学習支援と2つのタイプの授業群を組み、体験学習を適宜取り入れ、地域の情報をどう教材化するかについて考察、検討する。教材について稿者は独自に開発を進めており、課題を指摘しつつ、講座ならではの日本語教育の研究として考察を試みる。

【キーワード】 日本語教育，夏期日本語集中講座，教材開発，シラバス

1. はじめに

本稿の目的は、大学における正規の授業ではないところの日本語の短期集中講座における日本語教育をめぐって、その教材開発、シラバス、授業計画、教授方法、課外活動等全体にわたる教育指導・学習支援等について、吟味・検討し、考察さらには提案等を行うことである。「講座」とは、ごく一般的・平易な意味で言えば「講義ふう組織された〈出版物／講習会／放送番組〉」（三省堂国語辞典第七版）という捉え方での扱いになり、いわゆる単位を認定する正規授業ではない。学内的には社会人講座という格好で開講されているのが主なものであるが、夏期日本語集中講座はそういうスタンスでの学習支援事業となる。従って、教材開発、シラバス、授業計画、教授方法、課外活動等については、同一学年で共有する複数の授業担当者間の正式な基準も特に存在しないと言える点で、現時点では、講座の企画・運営者としては比較的自由にコーディネートできている。また夏期講座に限らず、例えば春期講座であっても派遣元の大学等機関との協議ができれば、部署として独自に講座が開講できるという点では比較的裁量の利きやすいものである。こういった講座の持つ特性を吟味しつつ、上記の諸問題について、学習支援上必要な、或いは効果的な教授方法、教材開発等をめぐって考察することは一定の意義があると考えられる。

表題では「短期集中講座」としたが、短期間において必ずしも集中的に日本語教育を行わ

ない場合でも知見が適用できる側面があるであろうものの、敢えて現在実施している「集中」の格好での講座としたにすぎない。「短期留学」とは、「主として大学間交流協定に基づいて母国の大学に在籍しつつ、必ずしも学位取得を目的とせず、他国・地域の大学等における学習、異文化体験、語学の習得などを目的として、概ね1学年以内の1学期間又は複数学期、教育を受けて単位を修得し、または研究指導を受けるもの」(『日本留学総合情報ガイド』)とされる。しかし、長期留学・短期留学についてはその期間についてはっきりした決まりがなく、旅行会社等が夏休み中の2,3週間といった3ヵ月以内で留学ビザを要しない場合でも「短期留学旅行」と呼んだり、それ以上の留学を「長期留学」と呼ぶこともあり、厳密には定義はないようだが、稿者は一般に「短期留学生」と言えば、3ヵ月から1年程度の学部等教育の規定の学期・期間を通して修学する留学生を指すとみなした上で、本稿で扱うところの学内で従前より使われてきた「短期」という表現は、実は半年や1年間等といった単位授与を目的とした学期又はセメスターではなく、6週間という期間の講座なのである。

こうした用語の若干の混乱は他にも散見されるようであるが、教育機関の全教育課程を修了する場合が「長期」であり、一部の学年相当期間や学期のみを修了する場合を「短期」とみなすべきであろう。従って、少なくとも3ヶ月～1年間の交換留学生であれば短期留学生と言える。本稿で検討するのは稿者が実際にコーディネートを行っている講座であるが、現状では6週間程度の期間のものである。従って、本稿で取り扱う講座の受講者は正確には「短期留学生」ではなく、学則上の正規或いは非正規の大学在籍学生に対する扱いとは異にすることになる。法的な規定では、留学生とは3ヶ月以上大学等教育機関に在籍する者であるため、本稿で考察する学習指導の対象者は、受入れ大学に在籍するわけではなく、「一般外国人」ということにすらなろう。とはいうものの、生活指導面の課題を考えれば、彼らは海外の協定校に在籍する学生であるので、規則上は学生番号の発行する受入れ校の学生でなくとも単なる一般人というわけにもいかない。本稿ではふれれないが、この点でもリスク・マネジメントをはじめ学習支援上幾つかの検討課題もあろう。

また、派遣校では講座の成績表を元にした単位認定を行うところもあり、正規授業に準ずる側面もある。一方、学生でない者も受講したり協定校以外の教育機関の学生からの参加希望もあり、そういった受入れ対応について幾つかの課題も残り、研究すべき様々な課題があるが、とりあえずは、本稿では、短期集中講座という形態における学習指導・支援を中心に、その中での幾つかの側面からの課題検討を必要に応じて少しく考察することとした。

2. 講座のシラバスについて

本稿で扱うのは「講座」であるため、適用できる正式な学則に則った様式や公開すべというという意味でのシラバスはないとも言える。しかし、学生派遣元大学への受講者募集のためや、学生向けに授業に関する情報提供を行うことは要求される。現在受講者として受け入れている者が英語圏出身の大学生、或いは英語圏の大学へ留学している学生であるため、谷守(2018a)でも詳しくふれられているが、特に中央教育課程審議会(2008)の「用語解説」にある「学生が講義の履修を決める際の資料になるとともに、教員相互の授業内容の調整、学生による授業評価等にも使われる」といったことを基本とするのがよいと考え、学生の語学レベルによる対応の違いはありうるものの、肝心の学生が理解できるようにシラバスは英語で書かなければならないということになろう。そして、単位授与がないことや正規の授業と校

時や授業時間の長さ等も異なり、学則上に則った格好での記述は難しい面があるため、しかも、そもそもシラバスには決められた形式がなくてよいとされているので、講座であればなおさらではあるが、独自に創意工夫した枠組みで、言い換えれば比較的より自由な様式での記述ができるという利点もあると言える。とはいうものの、一応は、記載内容として、基本的には「学習の目的」、「到達目標」、「具体的な評価項目」、「評価方法」、「学習内容・学習計画」等が挙げられよう。それらに係る詳細な基準や条件等については、講座の場合は企画・運営を経験的に熟知する者がある程度の裁量でもって、構築すればよいだろうということになる。

田中(2015)では、日本語教育で用いられる「教科書」は、シラバスそのものと言っても過言ではないとされており、岩田(2015)では、日本語教育の初級シラバスとは、初級で指導されるべきとされている文法項目のリストであるとさえ言われるように、日本語教育のシラバスが、大学等教育組織において捉えられているシラバス一般とはやや様相の異なることが窺える。しかし、谷守(2018a)でもふれられたが、日本語教育のシラバスを、よく見られるような文法の教授事項の羅列や指導上の若干の補足的な注意点を補うものといった狭い意味での捉え方ではなく、講座においても概ね上のような広く通用する枠組みに従ったもので捉える必要があるだろう。

講座総時間数には、「日本語」講義 105 時間、「日本語体験学習」5 時間、英語による「日本に関する講義」10 時間を充てている。授業実施は、50 分の「日本語」講義を毎日 4, 5 回(月曜日～金曜日)、「日本語体験学習」を 5 回、「日本に関する講義」を毎週 1 回 100 分で計 5 回行うといったように、上述したが、一貫した授業計画の枠組みがあるわけではない。講座の場合はこういった授業・時間数を便宜的に決めているので、学期で単位を付与する授業としては科目毎に規定の時間数を決めているのとは違って、シラバスの決まった枠組み(項目や書くべき内容等)を一定の基準に合わせて記述することはやや難しい。例えば、「日本語」講義が 105 時間というのは、総時間を分で表すと 5,250 分になり、1 講義を 1 学期 15 週実施した場合の 1,350 分で換算すると、7.78 単位となる。「日本語体験学習」は純粋に日本語の授業とは言い難いが講座の売り物の 1 つとして授業計画に含めているが、いわゆる「実習」ではなく、また講座に含まれるものの「日本に関する講義」は英語で講義されるものであるために日本語の語学教育とは異質な授業である。これは稿者が講座の企画を担当する以前より開講されていたもので、経緯上継続している。日本の理解を母語でより深く理解するために講義をしてきたものだが、従って、そのシラバスについては稿者は関知していない。単位を換算している派遣元の一部の協定校では講座全体で 6 単位までを認めているが、「日本語」以外の授業も含めた総 120 時間を甲南大学の科目で換算した場合は、8.88 単位¹⁾になるのだが、派遣元大学がそのように単位を少なめに見積もっているのは、体験学習や英語講義は「日本語」の単位としては認定されにくいためであろう。

こうしたことから分かることとして、或いは課題とも言えることは、派遣元大学が単位を「日本語」科目のものとして換算する場合に、せつかくの派遣先の日本で日本文化や日本社会について体験も含めて学んでもらおうという講座ならではの特長として創意工夫された授業の意義が理解されにくい(正式に単位認定されない)ということが、いわば‘もったいない’ということである。これは受入れ側の立場では対応できないやむをえない課題ではあるが、派遣元の大学において、教科書に従った座学的な「日本語」の授業以外に、体験的な学

習や英語講義を単位認定できる科目があれば良いということなのかもしれない（単位認定のための時間数の課題は残るが）。なお、留学生教育の範疇には「日本事情」というものがある。これについて次に考察したい

3. 日本語講座における「日本事情」教育はあるか

上にシラバスに関連して、「日本語体験学習」についてふれたが、講座の日本語教育について述べる前に、それに関連して「日本事情」という視点から少しく考えをまとめておきたい。

西井(2002)では「日本事情」に関して、日本語を習得することが最優先であり、その際に起こりうる様々な障害を乗り越えるための一つとして、「ことばの習得の上で欠かせない、その習得環境のもつ特徴に対する理解」という面が強調されていたとし、そのことがややもすると「日本語習得のための日本事情」という方向に陥りやすい状況を作り出していることを指摘し、また、本来は間接的に「日本事情」が「日本語」習得にも影響を及ぼすことで十分であるはずが、「日本事情」が日本語教育の一環になり、日本語教育における「読解」や「精読」と何ら変わらないものになってしまうケースもあることに言及している。従って、「日本事情」という観点から見ると、数週間という短期間における講座では、しかも、上述した派遣元大学における単位換算の問題を考えれば、短期集中講座においてはこうした「日本事情」としての教育を、時間数や担当者、教育環境等の諸事情により十分に施せない現状では、「体験学習」を「日本事情」という範疇で捉えることは難しく、そういった方向で捉える必要もないだろう。そして、「読解」や「精読」といった日本語と変わらない形態ではなく、「体験」と銘打っている以上、教育の過程は座学にはならないように企画をする必要性があるものである。

「日本事情」に関しては、西井(2002)の言うように、「日本事情」のありかたを極度に「日本語教育」とリンクさせて考えることは控えるべきであろうし、「質の高さ」という魅力も含まれなければならないものの、即効的な「楽しさ」や「利便」という満足を追求することとは異なり、また同時に、留学環境の魅力と、留学先の異文化や異なる制度の中での居心地の良さとも別物であるとする指摘も、「日本事情」については妥当であろうものの、本稿で考察する日本語の短期講座の場合は、「日本事情」という観点からの学習支援としては同様に考えにくい。率直に言えば、むしろ「即効的な『楽しさ』や『利便』という満足を追求すること」を念頭に置いており、西井(2002)の言うような「留学環境の魅力と、留学先の異文化や異なる制度の中での居心地の良さ」を講座の受講者には十二分に味わってもらえたらよいだろうという意味で体験学習を考えている。その上で「日本語体験学習」と銘打っており、日本語の学習へとリンクさせることを意図している。

この点では、上掲したように、西井(2002)の言う「本来は間接的に『日本事情』が『日本語習得』にも影響を及ぼすことで十分」であるように、体験学習が日本語教育に影響を及ぼすことを期待している点では「日本事情」と共通するのかもしれない。本短期集中講座における体験とは、具体的に、近隣の著名な神社や商店街訪問（手水、参拝、おみくじ、買物）、和太鼓（道具名称、日本人学生の指導と自らの実践）、茶道（道具名称、接待を受ける際の定句表現）、書道（短冊と半紙に書くメッセージや漢字語を考える）等であるが、すべて実践とインターアクションも伴う日本語の実践的習得が必然的に要求される。この場合の日本語習得では、文法習得よりも、例えば、現地の日本人との生の日本語によるインターアクションを

体験し、レポートをしたり、伝統的な施設や道具の名称といった専門的な語彙、体験する際に教師以外の日本人による生の日本語を聞いたり、自由なメッセージを考案して発表したりするといった体験的なプロセスを通して、日本語の学習へとリンクさせる意図で企画をしているわけである。上述したが、むしろ、短期間の講座では、初級者にとってやや難解な語彙や台詞は定着させるのが難しく、まずは日本語を使ってみて、むしろ体験できることを優先的に捉えて取り入れているので、即効的な楽しさや利便という満足と滞在地の環境の魅力と、滞在先の異文化や異なる制度の中での居心地の良さを追求するというところに重きを置くことにもなるのである。

また、京(2001)では、自身が教鞭をとっている学校での目標としてであるが、「日本事情」について、「日本で円滑に生活できるための総合力を養う」という目標を掲げ、他の科目で習ったスキルをフルに使用し、学習者自らさまざまな情報を得て、その情報を基に学習者自身が考え、各自が持つ力を最大限活用し発信することを挙げていると述べているように、短期集中講座における目標とは明らかに異なってよいだろうと稿者は認識している。上のような「日本事情」の目標は、短期講座では時間的にも確保が難しく、滞在地では本国で体験できないような生活において買い物やレジャーが楽しめ、居心地の良さが感じられることでよいだろうと考える。結果的には、そうした体験や学習が帰国後に日本語・日本文化の学習にプラスになるだろうという、いわば種蒔きのような意味合いで、講座に組み込む格好での企画が長い目で見れば有意義なのではないだろうかと考える。若い学生がこうした講座に期待するのは、本国での学期が終了した後の夏期休暇中に、たとえ遊学気分であっても、日本で滞在しながら様々な体験を味わい、日本語を学んでみようという性格の旅行的なものではないかとさえ、雰囲気的には感じられる。せつかくの休暇中の異国・異文化での教室での座学で終わってしまうようでは‘もったいない’とも思われる。ただし、「日本語」での単位換算も重要な事案であるので、文法面での学習の積み重ねは綿密に組み立てる必要はあることになる。

なお、講座期間中に2回の日帰りの研修旅行を企画し、引率も稿者自身が旅行会社と連携して実施している。これは正式には授業の時間数には算入されず、「体験学習」という範疇にも組み入れられない純粋な‘旅行’であり、レポートを課したり日本語教育にリンクさせることはしていない。体験としては、電車等公共交通手段やタクシーによる移動にしたことで、貸切バスの固定座席から長時間窓を通して街を見下ろす受動的なものとは違い、乗客や通行人等地元日本人との距離感を縮め、座席を譲ったり駅構内を自分の足で自由に、一般人と会話をしたり掲示を見るなどしながら移動し、生の旅情をより直接的に実感として味わえるということになり、満足度が上がることで、講座全体への参加意欲、満足度、残りの学習への動機づけも期待できるという効果があると感じている。事前に旅行に関する情報を作成し提供することで関心も上がるが、今後の課題としては、事前の授業の一部として組み入れ、旅行地や交通手段・買物等、旅行中の体験として想定できるような様々な事物に関する情報を教材化して、シラバスに組み入れることがより効果的な学習支援になろうと考えている。

4. 講座のシラバス又はスケジュール

前述したように、正規授業ではないものの、できれば一般的な様式に沿った格好でのシラバスの作成を目指すべきではあろう。ただ「履修」という用語は「受講」に代わり、履修条

件は受講申込の条件に相当する。本講座では、レベルを初中級日本語として日本語学習歴 150 時間程度以上の外国の大学生を対象としている。参加申込時のアンケートでは使用教材と学習した範囲や学習期間等を問うているが、稿者は実際には厳密にレベルの基準を当てはめずに柔軟に受け入れ、むしろ来日後のプリアントリー・テストによってクラス分けを行っている。かなや数十字程度の漢字の読み書きができ、文法知識がゼロでなければ、学習歴が同じであってもどうしても学力や習熟度には個人差が生じるものなので、事前の調査は、学習背景の異なる幾つかの大学から受講するという事情から、あまりレベル分けの根拠にならないのが実感として思うところである。クラス数が例年 2 クラスであり、それ以上のレベル分けは難しく、従って、各クラス内には大きくレベル差のある学生が混在するのは避けがたく、また、事前の調査は自己申告であるのと、複数校からの希望者に対して事前の学力審査を行うのは困難であること、協定校からの受入れは基本的に受け入れるのが前提であることといった諸現状からも、相応の期間以上学習していればあまり厳しく受入れ審査を行わなくてよいだろうと考え、或いは派遣元の大学の窓口での対応（学生の采配）を信頼する格好で受入れる方向で対応している。

従って、シラバス或いはスケジュールについては、2 クラスに学力差があるものの、概ねほぼ同じ教授内容で、詳細なスケジュールについては随時学生に配布している。一般的なシラバスとは違って、集中講座では毎日の学習に関する情報が、日々目の前に迫っているのも、具体的なスケジュールを提供する必要がある、学生には有用である。緻密にチェックして授業の内容、宿題、毎日のデイリークイズを確認するのに活用されている。[図 1]が実際のスケジュールの一部（1 週間分）であるが、毎日の各時限の授業に関する情報（担当者、教室、学習事項、教材、活動内容等）や必要に応じて注意事項等も記述している。

図のように、確実に学生に周知されるよう日本語と英語を併用した格好で記載しており、図中右欄の空欄には周知させるべき毎日の語彙クイズの問題を記入できるようにしている。これは、その日に学んだ材料の中から教師が厳選して、次の日の語彙クイズの問題として活用できるようにしており、学生は自分で次のクイズの問題を書き込むことで、常に語彙クイズを身近なものとして注目し、また授業中に興味を引いたり注目したりしたばかりの語彙を新鮮に捉えて、再度クイズで出題されることによって、関心と共に習得が強化できるというねらいがある。書く漢字を 2 字、読む漢字語を 2 語、意味を覚える 4 単語（かな書き可）を選び、配点をそれぞれ各 2 点、1 点、1 点とし、合計 10 点を毎日の成績の積み重ねに加えている。書く漢字を 2 文字としても、参加者の書ける既習漢字数が、学習期間が半年であっても 30 字程度とごく僅かな者もいる中では決して少ないというわけではなく、6 週間で単純計算で 50 字以上になり、英語圏の学生にとって負担が軽いというわけではない。また読む漢字は漢字語（単語）として与えるので、読める漢字数も百字程度になるのでこれも負担が軽いというわけではなく、あまり漢字学習の負担を過度にしないことで、集中講座におけるバランスの取れた学習事項の負担の配分を考慮している。下は授業担当者に対する「漢字・語彙クイズ」の実施に関するマニュアルの一部である。

その日に教えたページ内から（場合によっては学生の発表で面白かった語彙、教師が提供した言葉からでも自由に）授業の最後に選んで、学生のスケジュール表に写させます。確認しながら写させる時間は意外とけっこうかかりますので授業時間が越えないように余裕を持って授業の最後に指示してください。

- ・ 書く漢字2文字 (各2点) 例: 「安い」と「早い」。「牛丼」ならこれで2文字。
- ・ 読む漢字2文字 (各1点) 例: 「安い」と「牛丼」のように熟語の場合は1文字を指示するか, 「牛丼」で2文字としても良い。
- ・ 語彙4語 (各1点) 例: cheap と fast のように英語で指示。合計毎回10点

Class [A] Schedule [6月18日(月)~6月22日(金)] June 18-22 WEEK 3

Notice: On Mondays at 5th period, move to KIEC lecture room for LECTURE ON JAPAN (14:30-16:10)
This Friday you have 5th period lesson till 15:20, we experience Basic Wadaiko (Japanese Drum).

Date	1st & 2nd period Textbook にほんご Grammar & Writing 1st [9:20-10:10] 2nd [10:20-11:10] [Instructor/Room]	3rd & 4th period Textbook きいて はなす にほんご Oral, Aural Activity 3rd [11:20-12:10] [Instructor/Room]	5th on Mon/Thu. 4th [13:30-14:20] 5th period [14:30-16:10:25]	HOMEWORK (for Kanji & Word Quiz) Learn the following for the next quiz (1) 2 kanji for writing (2 pts × 2= 4) (2) 2 kanji for reading (1 pts × 2= 2) (3) 4 words (1 point × 4= 4) [10 pts in total (1)+(2)+(3)]						
6/18 月 Mon	Word Quiz (1)+(2)+(3) (Textbook にほんご) Ch.4 p.41-46 Conjunction 「が」「けれども」「のに」 「し」 Exercise 8 まで 絵を見て自由に創作 [Room 656]	(Textbook にほんご) p.36-37 歩きスマホ TASK 会話を作って練習 Create dialogue! [Room 656]	(Textbook) きいて はなす にほんご p.24 待ち合わせ 好きな歌・改札口や 歌の歌詞を決める。 練習・ロールプレイ等 [Room 656]	(1) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table> (2) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table> (3) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table>						
6/19 火 Tue	Word Quiz (1)+(2)+(3) (Textbook にほんご) Ch.4 p.46-47 でも/でも tema/demo Concession ~ 練習 10 Create and Output lots of sentences! [Room 656/Tanaka]	(Textbook) きいて はなす にほんご p.25-待ち合わせ 「~し。」好きな場所 の提案と疑問の想 談。ロールプレイ等 [R656/Tanaka]	(Textbook) きいて はなす にほんご p.26-27 待ち合わせ 確認「でしたっ け?」Where shall we go?自由に対合せ 練習 [R656/Tanaka]	(1) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table> (2) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table> (3) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table>						
6/20 水 Wed	(Textbook にほんご) Ch.5 p.53-54 ~練習 3 から/ので kara & node Plan Volitional Form(→ p.69) p.54-55 ために(軽く) How to express REASON [R656/Tanimori]	(Textbook) きいて はなす にほんご p.28-30 すみませ ん、どうも、ごめん , etc. Sorry, Excuse me, etc. [R656]	(Textbook) きいて はなす にほんご p.28-30 Sorry, Excuse me, etc. [R656]	No Quiz on Wednesdays Use this space for jotting any.						
6/21 木 Thu	Word Quiz (1)+(2)+(3) (Textbook にほんご) Ch.5 p.55-60 Exercise 4-6 ~んです、~からです、 じつは n desu, kara desu jitsuwa... Gesture & n desu これらを使って自由に創作 [R645/Tanimori]	(Textbook) きいて はなす にほんご p.31-33 注文 居酒屋・類別詞 What do you recommend? おすすめは? [R645]	(Textbook) きいて はなす にほんご p.31-33 おすすめは? マンガ review 応用練習、実演など [R645]	(1) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table> (2) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table> (3) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table>						
6/22 金 Fri	Word Quiz (1)+(2)+(3) (Textbook にほんご) Ch.5 p.60-63 Exercise 9 go to see / it is so much ...that.../ mi ni iku / ...sugite...~すぎて~だよ これらを使って自由に創作 [R645]	(Textbook) きいて はなす にほんご p.34-37 Exercise 注文しよう!何をいく つ?メニューがたくさ ん!だから好きなメ ニューでれんしゅう [R645]	No Textbook Study Japanese Words about Wadaiko, after that. Experiencial Japanese Go to Kōyū kaikan Big Hall. [★-15:20] Today & Next Fri. [R645/Tanimori]	(1) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table> (2) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table> (3) <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table>						

[図 1]

なお、下図はシラバスの一部として対外的(派遣元大学等)に示すスケジュールであるが、日程・校時等授業数を確認するためのごく単純なものである。

2018 Konan University Summer Program Intensive Japanese Course Weekly Schedule
Institute for Language and Culture

Week 1	6/4~6/8			17 hrs	Total 120 hrs	
Period	1	2	3	Lunch	4	5
Monday	6/4	Pre-entry Test	Japanese Orientation			
Tuesday	6/5	Japanese	Japanese		Japanese	
Wednesday	6/6	Japanese	Japanese		Japanese	
Thursday	6/7	Japanese	Japanese		Japanese	
Friday	6/8	Japanese	Japanese		Japanese	Japanese

[図 2]

また講座では下図のように、正規授業とは違って間違いのないように、必ずクラス別に全ての日程・時限について担当者名を記載した表を作成する必要がある。

2018年 夏期日本語集中講座 Aクラス						2018年 夏期日本語集中講座 Bクラス					
期	日	時限	1限	2限	3限	期	日	時限	1限	2限	3限
①	6月4日	月	谷守	谷守	谷守	①	6月4日	月	森川	木田	野口
	6月5日	火	田中	田中	田中		6月5日	火	野口	野口	野口
	6月6日	水	田嶋	田嶋	田嶋		6月6日	水	中川	中川	中川
	6月7日	木	谷守	谷守	森川		6月7日	木	木田	木田	野口
	6月8日	金	田嶋	田嶋	田嶋		6月8日	金	西村	西村	西村
	6月11日	月	丹羽	丹羽	丹羽		6月11日	月	田嶋	田嶋	田嶋
②	6月12日	火	田中	田中	田中	②	6月12日	火	野口	野口	野口
	6月13日	水	谷守	谷守	森川		6月13日	水	中川	中川	中川
	6月14日	木	谷守	谷守	森川		6月14日	木	木田	木田	谷守
	6月15日	金	丹羽	丹羽	丹羽		6月15日	金	西村	西村	西村
	6月18日	月	丹羽	丹羽	丹羽		6月18日	月	谷守	谷守	谷守
	6月19日	火	田中	田中	田中		6月19日	火	野口	野口	野口
③	6月20日	水	谷守	谷守	森川	③	6月20日	水	中川	中川	中川
	6月21日	木	谷守	谷守	森川		6月21日	木	木田	木田	谷守
	6月22日	金	丹羽	丹羽	丹羽		6月22日	金	西村	西村	西村
	6月25日	月	丹羽	丹羽	丹羽		6月25日	月	谷守	谷守	谷守
	6月26日	火	田中	田中	田中		6月26日	火	野口	野口	野口
	6月27日	水	谷守	谷守	森川		6月27日	水	中川	中川	中川
④	6月28日	木	谷守	谷守	森川	④	6月28日	木	木田	木田	谷守
	6月29日	金	丹羽	丹羽	丹羽		6月29日	金	西村	西村	西村
	7月2日	月	丹羽	丹羽	丹羽		7月2日	月	谷守	谷守	谷守
	7月3日	火	田中	田中	田中		7月3日	火	野口	野口	野口
	7月4日	水	谷守	谷守	森川		7月4日	水	中川	中川	中川
	7月5日	木	谷守	谷守	森川		7月5日	木	木田	木田	谷守
⑤	7月6日	金	丹羽	丹羽	丹羽	⑤	7月6日	金	西村	西村	西村
	7月9日	月	丹羽	丹羽	丹羽		7月9日	月	谷守	谷守	谷守
	7月10日	火	田中	田中	田中		7月10日	火	野口	野口	野口
	7月11日	水	谷守	谷守	森川		7月11日	水	中川	中川	中川
	7月12日	木	谷守	谷守	森川		7月12日	木	木田	木田	谷守
	7月13日	金	谷守	谷守	森川		7月13日	金	西村	西村	西村

[図 3]

[図 1]で示したように、1回 50 分の授業については、1・2 限を文法と書くこと (Grammar & Writing) を中心とし、3・4 限は「きいてはなすにほんご」(Oral & Aural Activity) として、実践的な運用能力を指導する授業として設定し、目的別に大きく分けている。スケジュールではあるが、余白には、該当日に学習する事項、教授要領、必要に応じて注意点等もできるだけ記載するようにし、1 頁を使って 1 週間分のスケジュールが一目で分かるように配列している点で、毎日の実際使用に有用な形で活用できるように作成している。各日各授業の下欄にはその授業担当者が思いついた宿題・課題を、学生にその場で記述させるように空欄を設けている。従って、各担当者独自の評価が各授業ごとに一定の配分で点数化されるように工夫している。なお、スケジュール表中にクイズや宿題を記載させるのは、忘れないように常に課題の中身を意識させるためであり、学生のクイズによる語彙、漢字の書き取り等に対する関心度は高く維持されるという効果は十分にあると考える。

欠席については、単位付与をしないこともあり履修要件とは言えないが、一応は 80 % 以上の出席を求めているものの、従前より全員問題なく受講してきている。これは、短期間の受講なのでクラスメートとの短い期間での交流や、日本語に加えて様々な情報を授業で提供することで欠席せずに参加したいという動機付けが強化できているからであろうし、授業参加

における満足度を高める創意工夫を凝らしているからであろうと考えている。病気や交通機関の遅延等による欠席・遅刻については自己申告で可とするなど、強く規則漬けしないことで講座に楽しく参加できる雰囲気醸し出している。使用教材についてはオリジナルの文法教科書を作成し（近刊予定）、会話等日本語の実践的運用授業については、従前は各種市販教材から抜粋したりするなどして活用してきたが、今後はオリジナルな教材開発を進めている。文法の教科書とともにこれについては後述する。

5. 講座の教材開発における課題

講座において問題になるのが、教材の選定、或いはオリジナルの教材の開発である。稿者が担当するようになる以前より『新日本語の基礎Ⅱ』を使用していたが、既成（市販）の一般教科書の場合は、前述したように、短期間の講座においては、西井(2002)が「日本事情」においては回避すべきとした、即効的な楽しさや利便という満足と留学環境の魅力と留学先の異文化や異なる制度の中での居心地の良さというものを追求する、ということをもっと重視するようにしており、オリジナルで作成している教科書では次のような創意工夫をしている。

(1) 題材の厳選・面白み

文法表現の導入や例文を列举する際に挙げる題材には、できるだけ渡航先、つまり、日本全体における社会・文化事情に関するものから、受入れ大学の地元周辺の地域にまつわる情報までをカバーするように工夫する。文法の教科書（出版予定）は汎用的に使用されることを意図しているので、日本の社会・文化事情をカバーするような題材を取り入れ、実践活動中心の教材（今後開発予定）では、地域に密着した情報・材料を扱ったものにするのが、学生にとって短期間の集中講座に参加した意義を感じさせることができるだろうと考える。なぜなら、これまでの経験からみると、一般の市販の教科書にある場面シラバス等による教授方法は確かに文法一辺倒の知識漬けの教授（そういうものがあるとして）に比べて、生き生きとした授業が展開できるだろう。ただ、同じ流れの授業の組み立てにおいても、出てくる題材が無難で平凡過ぎると、面白みに欠けてくるきらいがあるようにも感じられる。短期間の滞在中に、上述したように、ただし夏期講座の場合は「留学」と言うのは正確ではないので、「即効的な楽しさや利便という満足と滞在地の環境の魅力と滞在先の異文化や異なる制度の中での居心地の良さというもの」とするが、これを追求するのであれば、若い学生には少し思い切った情報を差し出すことで教育効果がいっそう上がるのではないかと考えている。

例えば、まず、文法教材であれば、下図のように、連体用法を学ぶ場面で「RPG ゲーム」といった語を駆使しているが、稿者も最近では学生の日本文化に関するマニアックな知識に驚かされることが多く、多くの外国人学生は概ね日本語教師よりもアニメやゲームといった分野をはじめ、日本のサブカルチャーに通じているので、メインカルチャーを講義するような「日本事情」的な科目の場合も別としても、「日本語」というあくまで語学の学習なのである以上、日本の文化や社会の最新情報を断片的であっても動機付けに利用して楽しく日本語を学ばせたりする肝心の教師が若者文化に敏感でなければ、オーソドックな社会・文化事情ばかりを説いて、学生との文化的センスのギャップに気付かないままでは得策ではないかもしれない。若い留学生の関心の向く材料（語彙等）を思い切った姿勢で取り入れる覚悟が必要ではないかと思う。

GRAMMAR II

The other plain forms of the verb/adjective can also modify the following noun.

(1) In the case of verbs

Plain form (of verb)	Dictionary form	Polite form (of verb)	Present ~ます
	TA-form (past form) [~た]		Past ~ました
	NAI-form (negative form) [~ない]		Negative ~ません
	TE-IRU-form (progressive form) [~ている]		Progressive ~ています

NOTE: IRU of the TE-IRU (ている) form is, in fact, the dictionary form. In the same way, you can consider ていた and ていない to be the TA-form and NAI-form respectively.

Example: 私がしている ゲーム は RPG ゲームです。The game I am playing is an RPG.
 _____ *RPG = a role-playing game
Watashi ga shiteiru gēmu wa āru pī jī gēmu desu.

[図 4]

(2) 媒介語の活用

Chapter 4 Though; Because...and...; Even if

安い おいしい 早い, 牛丼にしましょう。
Yasui shi oishī shi hayai shi, gyūdon ni shimashō.



PATTERNS

1. 空気清浄機は 少し 高いですが、やっぱり 買います。
Kūki seijōki wa sukoshi takai desu ga, yappari kaimasu. Though...
 The air cleaner is a little expensive but I'll buy it any way.

[図 5]

谷守(2016)でも媒介語の使用について考察されているが、稿者自身は学習者から英語による説明のない教材に対する不満をこれまで度々聞いており、図中には学習者の媒介語としての英語による説明を付しているように、文法について説明(特に媒介語による)のないことの多い日本国内発行の日本語の教科書とは差別化を図っている。尤も別冊で媒介語(多言語)による解説書が発行されているものもあるがその場合でも、解説書の内容が教科書とは独立していたりするなど、また、授業を受けながら二冊を同時に使うというのは現実には教師と学習者共に困難であり、実際には副教材の媒介語を授業中に同時に見ながら学習するという作業は行われなことが多いと思われる。また例えば早稲田大学の短期集中講座の使用教材では英語による説明を含む教科書(『げんき』)が使われていることから、即効的な習得が求められる短期間の講座では、日本語のみの編集による教科書は受講者にも使い勝手は良くないのだろうと予想する。以前、そうした教材を使用した時に副教材の媒介語表記の語彙リス

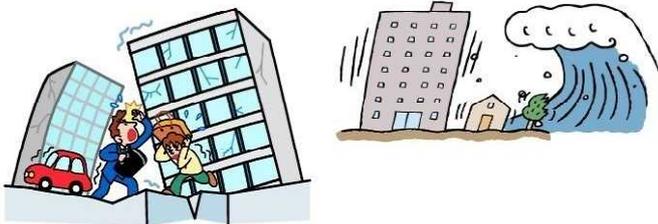
トを再編集するなど手作りの語彙表を作成したことがあるが、写し・編集等の苦勞を考えると、オリジナルで教材を作成した方が手っ取り早く、内容もふんだんに自在に創意工夫できるといふことで、教材開発に至ったわけである。

身近な話題としては、[図 5]のような食べ物が滞在先での一つの重要な関心事であろう。なお、「空気清浄機」のような最新の身近な語を随所に取り込んでいる。[図 6]では、やはり滞在先で目にする珍しい材料として取り入れて関心を高められるように創意工夫している。「燃えないゴミ」もユニークで必要な語である。[図 7]では日本らしく地震を話題にし、「震度」という語を取り込んでいる（写真は稿者で撮影した）。

<p>こんな所に 燃えない ゴミが 捨てて あります。</p> <p><i>Konna tokoro ni moenai gomi ga sutete arimasu.</i></p> <p>Non-combustible trash is dumped in such a place.</p> <p>車両に「女性専用車両」と書いてあります。</p> <p><i>Shayō ni "Josei Sen'yō Shayō" to kaite arimasu.</i></p> <p>The car announces that it is for women only.</p> <p>(Somebody wrote, "Women-only train car.")</p>	
---	--

[図 6]

こうした語は、文法理解をする中で軽くふれる程度に挿入されるもので、語彙レベルでの素朴な文化的理解にすぎないが、文法事項を運用する例文でも随所に入れ込んでいくことで、また、イラストを思い切って豊富に挿入することで、上述した媒介語活用の有用性に加えて、より具体的・明示的かつ即効的に理解を促すというねらいがある。イラストの使用にあたっては、正式に出版まで進めていく場合も想定して、著作権については提供者の承諾が得られるものを使っており、稿者自身も撮影する等して絵を使用している。

<p>Chapter 12</p> <p>hearsay, conjecture, observation</p> <p>震度6の地震があつたらしいです。</p> <p><i>Shindo roku no jishin ga atta rashī desu.</i></p>	
<p>PATTERNS</p> <p>1. 震度6の地震があつたらしいです。</p> <p><i>Shindo roku no jishin ga atta rashī desu.</i></p> <p>I hear that there was an earthquake with a seismic intensity of 6.</p>	<p>Hearsay: I hear....</p>

[図 7]

なお、講座でも授業においてのみ一時的にイラストや写真を活用するような場合であれば、稿者の場合は、最近では使いたいものを即座に Google 画像検索によって収集し、授業で配布するハンドアウトに取り入れたりして活用している。例えば文法表現であっても、「ながら」をキーワードとして検索すると何かをしながら別のことをしている場面の画像データが即座に容易に得られるので、視覚的な材料はこれまで以上に、大いに利用しない手はないと考えている。

また、[図 5-7]において見られるように、日本語による例文の下にはローマ字表記、さらに英訳文が付されているが、これは日本語文には読めない漢字が随所に含まれているからである。漢字にはふりがなが振られているにもかかわらず、敢えてローマ字表記による文を挿入したのは、初級者にとっては難解な漢字の混在する日本語文がふりがながあってもやはり読みづらいものであり、しかし、それを読もうと努めてもよく、平易なローマ字文を読んでもよく、ローマ字文に慣れたら漢字混じり文に挑戦してもよい等と柔軟に考えているからであり、学習者自身が自由に自分の能力を判断してどの入り口からでも読む作業に入れるように配慮しているわけである。

CONVERSATION 割り勘




けんじ: 来日して 2 週間 経ちましたが、日本での 生活の仕方は どうですか。
 マイク: 大丈夫ですよ。けっこう 面白いことが ありますね。
 よう子: 面白いことって、どんなことですか。
 マイク: お金の 払い方です。先日、友達 3 人と 一緒に 居酒屋で 飲んだり 食べたり しましたが、レジの前で みんな 自分の料理のお金だけ 払っていました。
 けんじ: 割り勘のことですね。みんなは 自分のお金だけ 払おうと 思っていますね。
 マイク: そうです。それに、計算が とても 正確で 驚きました。私は、自分が 食べた 料理を 計算したら、2,982 円 だったので、3,000 円 出す つもりでした。
 よう子: 18 円のお釣りですね。
 マイク: ええ。確かに 18 円のおつりを もらいました。レジの前で 小さな計算を して、時間が かかりました。
 けんじ: 店に 迷惑ですね。もっと お金の出し方を 考えた方が いいと思いますね。

WARIKAN (EACH PAY FOR THEIR OWN)

Kenji: *Rainichi shite ni shūkan tachimasu hita ga, Nihon de no seikatsu no shikata wa dōdesu ka.*
 You came to Japan and two weeks have passed. What do you think about living in Japan?

Mike: *Dajōbu desu yo. Kekkō omoshiroi koto ga arimasu ne.*
 It's no problem. There are some interesting things, aren't there?

Yoko: *Omoshiroi koto tte, donna koto desu ka.*
 Interesting things, what are they?

Mike: *Okane no haraikata desu. Serijitsu, tomodachi san nin to isshoni izakaya de nondari tabetari shimashita ga, reji no mae de minna jibun no ryōri no okane dake haratte imashita.*
 How to pay money. When I drank and ate together with my three friends in an izakaya the other day, they paid only for their own dish in front of the register.

Kenji: *Warikan no koto desu ne. Minna wa jibun no okane dake haradō to omotte imasu ne.*
 It's a Dutch treat, isn't it? Does everybody think that he will pay only his own bill?

Mike: *Sō desu. Soreni, keisan ga totemo seikaku de odorokimashita. Watasshi wa jibun ga tabeta ryōri o keisan shitara, ni sen kyūhachū hachi jū ni en datta node, san sen en dau tsumari deshita.*
 That's right. The calculation was so exact that I was surprised. Since it was 2,982 yen when I calculated the dish I had, I was going to take out 3,000 yen.

Yoko: *Jūhachi en no oturi desu ne.*

[図 8]

日本語教師から見ればおそらくは先入観からか、ふりがなさえあれば漢字混じりの日本語

文は容易に読めるはずだと思うものであるが、出版社の編集者の提案では、日本語が未修者である立場からみると、やはり日本語文は難しいものであり、教育学的には適当ではないかもしれないが、ローマ字文があった方がたしかに教材の‘売れ行き’も良くなる、つまり受け入れられやすいということなのである。確かによく考えてみると、読みができて漢字語の意味は難しい（「清浄機」「専用」「地震」「震度」等）ために、学習者には読み方と難解な意味の理解という2つの作業負担が一度に重なってくるのであるから、教材開発上、上のような捉え方は改めてなるほどと感心させられる発見でもあった。初級者には、平易で分かりやすい教材を開発することが肝要であり、自分で調べられるはずだ、予習してくれば授業は速く進められるはずだから見た目でこのぐらいの教授量ならすぐに済むにちがいないといったような姿勢で臨むと、徐々に学生には負担がのしかかって上述したような稿者の講座に対するねらいは遠ざかるだろうと考える。

上に述べたようなことから、[図 8]のように、読み物においても、ローマ字文と英訳文を並記し、どれから読んでもよいことにし、教師の授業の組み立て次第で必要に応じて、日本語文で読ませることはあってもよく、どのように活用してもよいという姿勢で教材開発をデザインしている。しかし、そうであっても、平易な教材をめざしながらも現状では（現在受け入れている学生のレベルからは）、こうした読み物までは十分に消化できるところまでに至っておらず、長めの文になると授業時間が足りなくなるのが実状である。

6. 文法事項の扱い

文法事項については、参加申込時に行う事前調査表の中で、下のような簡素な質問をしているが、クラス分けについて上述したように、あくまで目安的な意味で、少なくとも全くの初心者（ゼロレベル）でないことを確認するためである。短期間の講座のために正規授業のような厳格な習得レベルに合ったクラス分けと設置は現実的には教師の都合等運営上難しい面があり、レベル別の細かな対応ができない分は講座としての楽しめる学習・体験による満足で補うということで購入しているとも言える。

Check the following Japanese grammatical items you think you have mastered.		
<input type="checkbox"/> MASU-form (with its negative and past forms)	<input type="checkbox"/> The polite past form of adjective/verb	
<input type="checkbox"/> -ga hoshii desu	<input type="checkbox"/> Question words (nani /dare/doko/itsu/dōshite)	
<input type="checkbox"/> -tai desu	<input type="checkbox"/> The plain linking verb da	<input type="checkbox"/> TE-form of verb
<input type="checkbox"/> nagara	<input type="checkbox"/> -naide	<input type="checkbox"/> The plain negative NAI-form
<input type="checkbox"/> The plain past TA-form	<input type="checkbox"/> The dictionary form	<input type="checkbox"/> -tara
<input type="checkbox"/> Verbs of giving and receiving	<input type="checkbox"/> -te imasu	<input type="checkbox"/> -te mimasu
<input type="checkbox"/> -node/kara	<input type="checkbox"/> -ageru/morau/kureru	<input type="checkbox"/> -te okimasu
<input type="checkbox"/> -te arimasu	<input type="checkbox"/> -The passive	
<input type="checkbox"/> TE-form + verbs of giving and receiving	<input type="checkbox"/> The polite auxiliaries (-reru/rareru)	

[図 9]

実際のところ、現状では、[図 9]において学習者の既習事項として期待しているものは、「ます」、「ません」、「ました」、形容詞の過去形、疑問詞、「～がほしいです」等ぐらいまでであろうし、例年、受講までに学習してきているはずのテ形、辞書形等も定着はしておらず、講座の最初にまず、動詞の分類や辞書形の再確認と復習をしなければならないというのが実状

である。これは他大学の受入れ学生の実態によっては不要な作業であろうが、既習事項が定着していないところは見定めて対処する必要はある。

動詞分類やテ形が最初の大きな壁であることを再認識させられたものだが、講座の導入段階では重視する必要がある。なぜならば、その後の文を展開させるために必要な連体用法、「ている」「てみる」「てある」「てもらおう」等といった表現へと拡大させつつ、実際的な会話運用においても頻繁に使用する言語形式であるからである。

当初は学習歴から見て、派遣元大学には[図 10]の文法事項を申込条件の既習事項として求めているが、上述の学習者の定着の実状とのずれが窺えよう。このように、稿者の経験では、講座の授業計画においては、学習歴と学習の定着度とはあまりリンクしていないものとして講座の授業を備えた方がよいと感じている。

1 ~は~です	2 ここは~です
3 ~はどこですか, numbers (to hundred; thousand; tenthousand)	
4 ~時(oclock), 曜日(the days the wekk), ~時から~時まで~ます, ~時に~ます	
5 ~へ行きます, ~で行きます, ~と行きます	6 ~月~日
7 ~を~ます, ~で~を~ます, ~ませんか, ~ましょう	
8 ~に~をあげます/もらいます	
9 Adjective(non-past/affirmative/negative/adnominal use)	
10 ~が好きです, ~が上手です, ~がわかります, ~は~があります	
11 ~から, ~	12 ~にいます, ~にあります,
13 Counters og things/persons (~つ/~人/~枚/~台/~回, etc.)	
14 (period of time) + かかります	15 ~でした, ~かったです
16 ~(のほう)が~より~, ~がいちばん~	17 ~がほしいです, ~たいです
18 (verb) に行きます	
19 ~で, ~てください, ましょうか, ~ています	20 ~てもいいです, ~てはいけません
21 ~で~, ~てから~, ~は~が~です, ~くて~, ~で~	
22 ~なければなりません, ~なくてもいいです, ~なくてもいいです	
23 ~ことができます, ~は~ことです, 前に, ~	24 ~たことがあります
25 ~たり~たりします	26 ~くなります, ~になります
27 The plain form	
28 ~と思います, ~と言います, でしょう?	29 The basic adnominal use
30 ~時 (When...)	
31 ~あげます/もらいます/くれます (Verbs of giving and receiving)	
32 ~たら(When/If), ~ても(Even though/Even if)	

[図 10]

7. 実践的日本語運用の指導

前掲したスケジュールに見られるように、文法・書くことを中心として授業群に続いて、実践的運用 (Oral & Aural Practice) を目的とする授業を組んでいる。これは、新規事項を学ぶのではなく、直前の新規文法事項或いは既習の表現を使った実践的な練習をするための授業である。現時点では、まだ教材開発中であり、今後の課題としてここでは述べたい。

従前より、市販の会話を中心とする教材を複数冊で比較しながら、同程度のレベルの事項、教授材料の面白さ、場面の適切さ、構成上の使い勝手の良さ等を考慮して、良いところ取りをして教材として使用してきた。しかしながら、それでもいろいろと改善したいと感じられる

箇所が多々あるものであり、だからといって、一気に教材開発・作成を行うのは現実的には困難であった。文法・書くことを中心とする教科書の開発・改善に目途がつき、現在はこの部分での教材開発を進めつつあり、次期集中講座ではオリジナル教材としての使用を準備している。

まず言えることは、題材についてであるが、従前は明白に認識しなかった課題を発見したことである。これまで「日本語体験学習」において簡素な冊子を作成してきたが、そこに出てくるユニークな語彙や表現を学生が関心を持って学んだり、オリジナルな旅行（授業の一環ではないが）冊子を、素朴に面白いと思えるようにできるだけ学生視点から見た観光ポイント等に焦点を当てて作成すると、正統な既成のパンフレットよりも興味を持たせたりすることに成果があるという実感が持てたことがきっかけで、ようやく気づいたことである。少々大袈裟ではあるかもしれないが、実は、教材開発においては大きな‘気づき’であったと考えている。

これまで活用した市販の会話教材において、例えば、電車の乗り方をテーマとして様々な会話が扱われていたような場合に、東京の地下鉄線名が出てきたりする。これを滞在先やその近辺の実際の電鉄会社名（阪急、阪神、JR 神戸線）や車両種別（特急、準急、普通、快速、新快速等）、主な駅名等を、ふんだんに写真で取り込めば、はるかに関心も高まり、有用性も実感できるだろうということである。もちろん授業において教師が自作でハンドアウトやプレゼン・データを作成して授業で使用することはよくされてきているが、それらは授業に充てられた規定の教授内容を補う格好で作成する場合が多いのではないかと思うが、ここで考えたのは、講座を通して体系的に、つまり、既習の文法事項や表現を実践的に運用しながら練習できるように、材料に加えて、文法事項とリンクさせた格好で、テキスト文を組んでいく、或いは発話できるような構成を練っていくということである。

稿者自身がすでに数百枚撮影しているもののうち、一見何の変哲もない素朴な[図 11-12]のような写真を教材に組み込むとしよう。これは実際に受講生が乗り降りする最寄りの駅であるが、まず知っている光景の身近さに関心が高まるであろうし、日本語の練習としては必要な漢字（毎日乗り降りする駅・店舗名や看板）の読み方にはじまり、「階」、「エスカレーター」、「エレベーター」、「駅前広場」、文であれば「～はありますか」、「ここで集合します」、「ここからどうやって大学に来ますか」等、1枚の写真からでもいくらかでも教授事項を増やすことが容易にできるのである。

また、枠に嵌まった機械的な練習ではなく、講座では、こうした写真やイラスト等をトリガーとして、できるだけ自由に、対話であればペアでダイログを創作させる等して、また、発表或いは発表後に記録させたものをフィードバックのためにタスクシートとして提出させる等するわけであるが、ヒントを元に面白い対話や一文であってもよいが創作するというこうした自由なアウトプットの言語運用作業は、学生の学習活動がアクティブになる大きな要因となるだろうと、経験上からも考えている。

例えば、[図 12]のように、駅前の格安チケットの販売機といったユニークな文字情報を視覚的に加えれば、交通に関する有益で斬新な情報を知ることによって地域における個人生活に対する深みを感じ取り、それによって効果的な日本語の学びに結び付けることができよう。

「格安」といった語は教科書ではあまりお目にかかれぬユニークな語であろう。こうした意識を持った視点で地域社会を見直すと、そこは日本語の宝庫であると改めて認識させられ

るのである。



[図 11]



[図 12]

今後、こうした地域生活の場面で目にする事物を数多くデータとして活用し、教材化する方向で進めるが、現時点では教材開発中のため、なお検討中の課題であり、成果を例示することは別の機会に譲るとして、従前よりの経験からみれば、市販の汎用的使用に耐える一般教材の使用よりは、少なくとも長期の正規授業の体系的な教材化を実現することは教師にとって負担が大きすぎるという意味でも、短期間の集中講座ならではの日本語教育として、受講者の滞在先での居心地の良さや満足感と共に日本語学習にもリンクさせられるという格好で、学習支援上の効果がいっそう高まるものと確信している。視覚的な情報を豊富に取り入れることが、視覚的に風景や情景が新鮮に見える日本での短期間の滞在中に、日本語やできれば地域の事情も学べる講座というものにおいては、とりわけ有効であろうと思われる。

こうした格好で教材化に取り入れるとすれば、受講中の旅行についても、授業で使用する教材の中に、その情報を視覚的に多く取り込むことによって、実践的運用に結び付く日本語の練習ができるだろう。旅行も楽しさと居心地の良さ、満足感でもって満喫できるようになることが、新しく出会った仲間との交流も深め、教室内の学習にも好影響をもたらすと期待できている。なお、教材開発において課題となるのは、IT 技能であろう。多くの画像、イラスト、音声、動画等の収集と編集、場合によってはそうしたデータの創作（電子データ化）、さらには、教材としての体裁にまとめる編集技術等、日本語教師はおそらく多くの一般の講義担当者とは違って、絵本作家のような創作技能と能力が必要かもしれない。それ相当の技能を学ぶ必要があるであろうことも、こうした授業計画と教材開発のためには多くの日本語教師に求められるのではないかと考える。

8. 教授方法・授業の組み立てについて

教授方法・授業の組み立てについては、提供する教科書・教材は最低限消化した上で、教師の裁量による練習のやり方もお願いする格好にしている。消化する教授内容についても、上述したように、学生間のレベル差があるので、必要に応じて割愛してスキップすることも許容することによって、むやみに理解困難な事項までをも時間を割いてこなすよりは、柔軟に流しながら、練習等教授事項の運用面（文法の時間であれば、Free Space Exercise といった形式で自由創作等アウトプットを中心にする）での教授時間に充てることを重視

し、教師にも念入りにそう伝えている。教師の裁量の時間をとることを重視するのは、規定の教材に縛られると、学生のレベルや特性によっては経験のある教師なりの経験則に則った教授が十分に活かされなくなるおそれもあるからであり、枠組みに当てはめさせることで学習支援が萎縮しては教師の力量が発揮できないなど、‘もったいない’からである。経験によって、教師が例えばゲーム活動を活用して漢字や語彙学習を促したり、稿者自身からみても参考になる指導・学習支援を実践してくれる教師も現れるものであるから、相乗効果も期待できることになろう。

講座では文法学習と同様に語彙学習も肝要であると考え。なぜならば、滞在地としての外国（日本と滞在する地域社会）における生活の場では、無尽蔵の語彙に巡り会うわけであるから、そうした環境の中で、上述した教材開発において重視する生の経験で身近に感じる教授材料から、より面白く興味の引く語彙が厳選できるという教師の格好の立場を最大限に活かせばよく、語彙と共に表現を楽しく使いこなせるようにもっていくことで学習支援効果が引き出せると感じている。さらには若者言葉や基本的な方言等までカバーすれば、既成の教材にはないユニークな教授材料をふんだんに用意することができる。

9. 講座の成績

短期間の講座については、教務レベルでの正式な成績の発行を待つまでもないため、成績は即座に算出するのが、受講者にとっても満足感に結び付く意味でも良いだろうと考える。

CLASS A		Summer Intensive Japanese Program																									
Name	Daily Quiz	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	回数	15%の うち	Daily Quiz	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
	10	10	10	10	10	10	9	10	10	10	10	11	14.86	10	10	10	10	10	10	10	10	0	0	10	10		
	10	10	9	10	10	10	9	10	0	10	10	11	13.23	9.5	10	10	10	10	9.5	10	10	10	10	9.6	8.5	1	
	9.5	10	9	10	10	10	10	10	5	5	9	11	13.30	5	9	7	8.7	8	9.5	10	6	8	10	9.9	10		
	10	10	6	9	10	10	10	10	9	10	10	11	14.18	10	10	10	9.5	9	0	10	10	10	9.5	0	10		
	9.5	10	10	8	10	10	10	10	9	4	10	11	13.39	9.5	9.5	9	10	9.5	9	8	8.5	0	9.5	9.6	8		
	10	10	10	10	10	10	9	10	10	9	10	11	14.73	9	10	8	10	9	9	10	9.2	9.5	10	9.9	9		
	10	10	8	10	10	9	10	10	8	5	10	11	13.57	5	10	10	10	7	9	10	9.5	10	10	9.8	9	1	
	10	10	10	9	10	10	9	10	8	8	10	11	13.98	8	10	9	9	9.5	9.5	10	9.5	10	9.5	10	9		
	10	10	10	10	10	10	9	10	10	10	10	11	14.86	10	10	10	10	10	9.5	10	10	10	10	10	10	1	
	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	11	14.86	9.5	10	10	9.6	10	10	10	9.8	9.5	10	9.3	9		
	9.5	10	9	10	7	8	9	7	3	4	3	11	10.57	3.5	3	10	7	7.5	10	10	3	8.5	10	9.8	9	1	
	8.5	10	7	10	10	10	9	10	2	7	8	11	12.20	6.5	7.5	10	8.5	8	10	9.5	8.5	5.5	10	9.9	8		
	10	10	10	10	10	10	10	10	9	6	10	11	14.25	6	10	10	10	10	9.5	10	9	10	10	9.9	9		
	10	10	8	10	10	10	9	10	7	7	10	11	13.64	6.5	10	10	10	10	9	9	9.5	7	10	9.8	9		
	10	10	10	10	10	10	10	10	10	9	10	11	14.66	8.5	9.5	9	9	9.5	10	10	10	10	10	8.5	9.8	10	

[図 13]

[図 13]は、クイズをはじめ、スピーチ、In-class Task、小レポート、プレゼンテーション、Lecture on Japan 等、幾つかのタスクの点数（すべて 10 点に統一）の入力データ例であるが（期末試験等は点数は大きく設定している）、全て自動的に[図 14-15]に示すような個人成績表が、成績の分野別配分比率に従って、入力と同時に印刷できるように表計算ソフトで設計しているので、講座の修了式で本人に手渡しすることができる。こうした迅速に対応できることが講座ならではの可能になることであり、受講生にとって満足につながるものとなるだろう。

現時点では、講座のシラバスにおいて[表 1]のように設定している。この配点の半分を中期の中間成績において算出し、[図 14]のような個人票として手渡し、講座後半にあたる半分の成績を算出し、中間成績と共に全期間の成績として並記した[図 15]のような個人成績票を、あくまで仮の成績表として（正式には事務経由で後日派遣校に郵送する）手渡ししている。中間個人成績票を作成する目的は、協定校からの要望により、受講者の初めての講座に対する

不安を和らげることに、講座前半の出来具合をフィードバックして自己の学習状況を意識させることであるが、こうした成績の迅速なフィードバックも講座ならではの対応しやすい学習支援の一環であると言えよう。

[表 1]

Grades are determined on the following basis.	
1. <u>Daily Quizzes (kanji and vocabulary)</u>	30 %
2. <u>In-class Quizzes (Grammar & Writing, Oral & Aural Performance*, and Speech)</u>	35 %
3. <u>Assignments (Reports of "Lecture on Japan")</u>	5 %
4. <u>Comprehensive Final Exam</u>	30 %

なお、下の個人成績表には、[Daily Quiz]、[Assignment]、[Task-Test]を設けており、いわゆる[Participation]は設定していないが、これは、Task において教師が独自に課すことのできる自由裁量の課題を授業内において評価することが可能としているためであり、出席の「態度」そのものはややもすれば出席そのものになりかねず、「日本語」としての成績に算出することは考えていない。

Mid-term Grade (tentative) Issued on June 28, 2018 (Konan University)				
Student's Name				
Subject		Summer Intensive Japanese Program		
Class		CLASS A		
Instructor		Terumoni Masahiro		
Jun 4~ June 22	Daily Quiz 15%	Assignment 2.5%	Task+Test 17.5%	SUB-TOTAL
	14.86	2.25	15.29	32.40 / 35%
June 25~July 12	Daily Quiz 15%	Assignment 2.5%	Task 17.5%	SUB-TOTAL
				/ 35%
Final Exam				30%
Total				/100

Daily (Kanji, Vocabulary) Quizzes [30%] Assignments (Lectures on Japan) [5%] In-class task [35%] Final Exam [30%] (Grammar=20%, Speech test=5%, Interview test=5%)

[図 14]

Final Grade (tentative) Issued on July 12, 2018 (Konan University)				
Student's Name				
Subject		Summer Intensive Japanese Program		
Class		CLASS A		
Instructor		Terumoni Masahiro		
Jun 4~ June 22	Daily Quiz 15%	Assignment 2.5%	Task+Test 17.5%	SUB-TOTAL
	13.30	2.13	15.72	31.14 / 35%
June 25~July 12	Daily Quiz 15%	Assignment 2.5%	Task 17.5%	SUB-TOTAL
	11.67	2.42	17.31	31.40 / 35%
Final Exam				30%
Total				89.27 / 100

Daily (Kanji, Vocabulary) Quizzes [30%] Assignments (Lectures on Japan) [5%] In-class task [35%] Final Exam [30%] (Grammar=20%, Interview test=10%)

[図 15]

なお、谷守(2018a)においてもふれられているが、早稲田大学教育・総合科学学術院が文部科学省との問答(2016年12月)として公開している下の情報から、出席点については成績評価には加点要素とすべきでないことが認知されており、出席態度についても講座における「日本語」力としての評価には含めない格好で対処している。(下線部は稿者による)

Q シラバス記載の成績評価の基準として、出席点を記載していると実地視察においても「授業に出席するのは当然のことであるため、出席するのみで加点するような評価方法は見直すこと。」という指摘がなされているが、出席点が許容される基準についてお示しいただけないでしょうか？

A 総合的に評価する中で出席を加味することは問題ありませんが、出席のみである程度の点数を与えるなどの評価方法は適当でないと考えます。

そのために、担当教師の裁量で独自に自由なタスクが随時設定できるようにし、授業内でそれを通して評価すべきと考えている。それが上述した成績の配分のうち大きく 35%を占めるように設計しているのである。

10. まとめ

本稿で考えた短期集中講座としての日本語教育においては、西井(2002)からの言葉を別の目的で援用した格好になるが、即効的な楽しさや利便という満足と滞在地の環境の魅力と滞在先の異文化や異なる制度の中での居心地の良さというものを追求することを、むしろその目的に据えてよいだろうということを提案し、その中でそれを視野に入れたシラバス、教授方法、教材開発、成績のあり方等をめぐって考察してきた。特に滞在先としての地域社会における日本語の語彙を豊富に含む写真等の視覚的情報を教師が効果的に活用できるように収集、編集し、テキスト文を既習の文法事項にリンクさせる形で日本語文の創作、或いはアウトプットを重視する方向で、受講者には自由に写真から創作するように促す学習支援(「Free Space Exercise」を中心に)が、短期間の講座にとっては、有効であろうと考えた。「きいてはなすにほんご」として設けた言語運用面の授業群では、教材作成はなお開発中であり、成果は今後の課題ではあるが、従前よりの既成の教材を断片的に活用してきた方法よりは学習支援の活性化に期待が持てるだろうことを、幾つかの視点から考察した。

注

1) $(120 \text{ 授業時間} \times 50 \text{ 分}) \div (15 \text{ 週} \times 90 \text{ 分} \div 2 \text{ 単位}) = 8.88 \text{ 単位}$

参考文献

- (1) 京祥太郎(2001)「日本語教育における『日本事情』の捉え方--日本事情用教材分析から考察」『留学生教育』6, pp.89-94, 厚有出版.
- (2) 谷守正寛(2016)「日本語教育における媒介語活用の課題と考察」『言語と文化』第20号, pp.81-102, 甲南大学国際言語文化センター.
- (3) 谷守正寛(2018a)「学部正規留学生のための日本語教育シラバスについての一考察—甲南大学の場合を中心に—」『甲南大学教育学習支援センター紀要』第3号, pp.19-38, 甲南大学教育学習支援センター.
- (4) 谷守正寛(2018b)「日本語教材開発をめぐって—教科書の構成を中心に—」『甲南大学総合研究所叢書』第133号, pp.9-42, 甲南大学総合研究所.
- (5) 中央教育課程審議会(2008)『学士課程教育の構築に向けて(答申)』
- (6) 西井和弥(2002)「『日本事情』科目の意義に関する一考察」『NUCB journal of language culture and communication』4(2), pp.25-33, 名古屋商科大学外国語学部.